

日本語学・日本語教育学部会

【概要】

田嶋 明日香*・洪 春子**

日本語・日本語教育学部会は、12月12日（火）午後12時30分から16時40分まで文教育学部1号館大会議室にて行われた。

前半の日本語学部会では、大学教員2名、大学院生2名による研究発表が行われた。後半の日本語教育学部会では、大学教員1名、大学院生2名による研究発表が行われた。以下、それぞれの発表内容をまとめ、報告する。

1. 宇野和（お茶の水女子大学大学院生）

「Twitterにみるオノマトペに後接する接尾辞ミの機能」

宇野さんは、Twitter上で使用されている新しいミ形（「つらみ」「行きたみ」など）について研究されている。今回の発表では、「ぼかぼかみ」「ふっくらみ」など、オノマトペを語基とする新しいミ形に注目し、その種類と機能の調査報告をされた。新しいミ形は様々なオノマトペと結びつくものの、①最後が促音のオノマトペ（「ヒュッ」など）②6拍以上かつ畳語のオノマトペ（「ぶるんぶるん」など）③単なる動作を表すオノマトペ（「すっく」など）④擬音語（「ガッチャン」など）は新しいミ形になりやすく、状態を表すオノマトペが新しいミ形になりやすいことが明らかになった。また、形容詞+み（「ねむみ」など）と同カテゴリーのオノマトペ+み（「すやすやみ」「ぐっすりみ」など）との比較から、オノマトペの新しいミ形は意

味の細分化が主な機能であると分析された。質疑応答では、新しいミ形の用言的用法やあいさつとしての使用、「さ」と「み」の違いについて議論が行われた。（田嶋）

2. 李恩兆（高麗大学大学院生）

「日韓外国語の定着形態に関する比較研究」

李さんは、日本語と韓国語における外国語の定着について研究されている。今回の発表では、国立国語研究所（日本）と国立国語院（韓国）が2006年に発刊した報告書からそれぞれ35語と20語を選出し、各語の国語辞書の収録状況や新聞・コーパスでの使用状況を調査し、10年間の変化を報告された。国語辞典の収録の有無から外国語と外来語の区分を明らかにした上で、両言語の共通点として、辞書に収録され続けている言い換え語（「수요（「needs」の言い換え語）」「顧客（「client」の言い換え語）」など）は使用頻度が高いことを指摘された。そして、日本語は「公開市場調査（「operation」の言い換え語）」が使用されずに「オペレーション（「operation」の音表記語）」が使用されるように、外国語が外来語となる割合が高くなっている一方、韓国語は「시이오（「CEO」の音表記語）」よりも「최고경영자（「CEO」の言い換え語）」が定着しているように、外国語が外来語となる割合が高くなっているという結果を示された。質疑応答では、辞典の性質や選定、国語辞典での複合語の収録について意見が交わされた。（田嶋）

*お茶の水女子大学大学院院生

**お茶の水女子大学大学院院生

3. 永澤濟 (名古屋大学)

「壁をこえた法律家たち—近代口語化の実践—」

永澤先生は、近代日本における判決口語化の理論的主導者や実践者の思想を考察すると共に、先駆的な口語体判決の実態について発表された。特に櫻木繁次裁判官と山下辰夫裁判官の口語体判決に注目し、櫻木口語体判決は現代の書き言葉では用いられない口語性の高い表現および接続詞の多用や直接引用のスタイルが見られ、山下口語体判決はカタカナによる伝統的なスタイルのもと命令形や非口語体を用いるなど、独自に口語化を追究していることが明らかになった。両者の差異は判決口語化が容易でなかったことを示し、容易でなかった理由としては、漢文訓読系の文体が備える「威厳」や「洗練」を維持しながら「卑俗とか冗漫とか感じないやうな立派な文體」を実現する適切な口語表現がわからなかったこと、裁判の平易化・民衆化を目指す一方で裁判所の權威を保持する体制も存在したことを挙げられた。そして、判決口語化は「裁判に対する國民の信頼と威信を保つ」「自己の所信や考えの筋道を正確に、自由に表現し判決の質を高められる」ことを目指したものだということを示唆された。(田嶋)

4. 金嚙泳 (同徳女子大学)

「日本と韓国の若者言葉」

金先生は、日本と韓国の若者言葉を比較・対照し、若者言葉の造語法の特徴について発表された。若者言葉には「情報」が主になって「形式」に発展する「コンテキスト」の造語法（「ロールキャベツ」「핑거프린세스：フィンガー・プリンセス」など）と、「形式」から「情報」が生まれる「語構成」の造語法（「나ㄴ、나ㄴ레、=けいたい：携帯」「언ㄴ1=언ㄴ니：オンニ：姉さん」など）があり、両者は区別する必要があることを強調された。その上で、語構成の造語法は①音の転換②表記の転換③縮約④拡張⑤再配列⑥付けたし⑦派生⑧段階・繰り返し⑨言い換え⑩オノマトペ、

コンテキストの造語法は⑪語呂合わせ⑫転用⑬態度⑭若者の文化に分類できることを示された。また、現れる「媒体」による影響や、音節文字である日本語と音素文字・単音文字である韓国語という両言語の性質差の影響も受けて造語されていること、日韓で若者言葉や流行語の輸入・輸出を互に行っていることも指摘された。(田嶋)

5. 伊藤聖子 (お茶の水女子大学大学院修了生)

「助詞「は」の習得—主題化の発達過程を探る—」

伊藤さんは、中国語を母語とする日本語学習者の助詞「は」の習得を分析し、主題化の発達過程について発表された。KYコーパスの口頭産出データを調べたところ、中級から上級にかけて「格助詞+は」の文法形式が習得され、複数の意味用法を持つ格助詞においては主題仮説を支持する結果が得られたと報告された。また、口頭の産出では省略や無助詞化の可能性のあることや、話題によっては特定の助詞が使用されない可能性があるという口頭産出データの欠点を補うため、空欄補充調査を行なった。その結果、助詞の選択の際には、格助詞の影響を強く受けるものの、文頭に名詞句があるかどうかは影響しない可能性があり、談話の中で取り立てられる内容かどうかを判断するよりも、動詞や名詞との結びつきが強く影響するとの報告がなされた。(洪)

6. チェン・ユンチュアン (ハワイ大学院生)

「中国語母語話者による日本語の関係節の習得について」

チェンさんのご発表では、中国語を母語とする日本語学習者の日本語の関係節の習得について報告がなされた。日本語と中国語は関係節の主名詞の中にある再帰代名詞の解釈が異なり、日本語のほうが中国語より制限されると説明された。中国語を母語とする日本語学習者の日本語の関係節の主名詞の再帰代名詞「自分」に対する解釈を真理値判断による実験を用いて分析した結果、中級レ

ベルの日本語学習者は中国語母語話者と同じような解釈をし、母語の影響が見られたものの、上級レベルの日本語学習者は日本語母語話者のような解釈をし、目標言語のインプットと母語の知識から直接に学習できない複雑な知識を暗示的に習得した可能性がある」と指摘された。(洪)

7. 福田伸一郎 (ハワイ大学)

「日本語話者の直感の数量化から何が学べるか：個々の直感の壁を超えて」

福田先生のご発表では、日本語の格助詞に関する統語的分析について報告がなされた。日本語母語話者に格助詞に関する文の容認度判断テストを行い、日本語母語話者の自然発話コーパスを調べた。日本語母語話者の自然発話コーパスにおいては、関連する用例が少ないため、調査方法に関する妥当性に疑問が残る。一方、容認度判断テストでは格助詞の分布は文の構造特徴と関わることを示された。特に、「好き」に対して、対格「を」と主格「が」が共に使えるが、格助詞の選択には、目的語の有生性が関わりとの報告がなされた。実験によって引き出された日本語の文の容認度は日本語の統語的分析に貢献できると指摘された。(洪)

以上、日本語・日本語教育学部会における講演と研究発表についてまとめた。異なる背景を持った人たちが集まり、研究を通して交流が行われた非常に有意義な会であった。今後も分野、機関、国を超えた交流が期待される。